

水城跡と文化遺産

■ 1. 水城の築造

福岡平野と筑後平野をつなぐ狭い平地を横切る、長さ約1.2km、高さ約9m、基底幅約80mの大きな堤が水城です。

水城は、7世紀における朝鮮半島を巡る国際的な緊張関係の中、大宰府を防衛するために築造された土塁です。『日本書紀』天智3年(664)是歳条には「筑紫に大堤を築き、水を貯えしめ、名けて水城と曰う。」と記されており、翌665年に築かれた大野城・基肆城とともに大宰府の防衛施設としての役割を担いました。

御笠川を挟んで東と西に残る土塁は、そのほとんどが人工の盛土で、版築工法と敷粗朶工法が用いられています。版築工法とは、砂と粘土を交互に5~30cm程の厚さで固く突き固めていくもの、敷粗朶工法は、地盤の軟らかい箇所に植物の葉や枝を敷き詰めて強化するものです。当時における最先端の土木技術が用いられた水城の構造は堅固なものであり、1350余年を経た現在でもその威容を誇っています。

水城には土塁だけでなく、『日本書紀』に記されているように水を貯えた濠も築造されていました。昭和5年(1930)より行われてきた発掘調査により、水城の北側に幅約60m、深さ約4mの大規模な外濠が存在していたことが確認されています。この外濠へは内側(南側)から土塁内部を通る木樋を利用して水が送られたと考えられています。木樋は内法で幅1.2m、高さ0.8m、底板は縦に2枚の板を交互に組み合わせ、これを銚で留めており、水城跡では計4箇所を確認されています。江戸時代に水城から「大なる木」を掘り出したとの記録があり、観世音寺に伝来し、九州歴史資料館(福岡県小郡市)に所蔵されている木樋以外にも、宮村講堂や筑前国分密寺の扁額に用いられたと伝えられています。



■ 水城跡 (西)



西門礎石



西門跡

■ 水城跡 (東)



東門礎石



東門跡

文化遺産④ ~水城大堤之碑~

東門跡を訪れると、一際大きな石碑「水城大堤之碑」が見えます。この石碑には水城地区の人々が古来より守り受け継いできた水城への想いが込められています。

古くから名所として知られた水城は、太宰府へ行き交う人々の目に留まりさまざまな文献や絵画に登場します。明治時代に入ると、水城跡を広く知らしめるため福岡元寇記念碑建設事務所が東門付近の国道に木標を建立します。その後、経年により腐朽したため、地元水城村の有志によって再建されましたが、これも腐朽してしまいました。そこで、大正4年(1915)11月、大正天皇御大典の記念事業として水城村青年会の手によって建立されたのが「水城大堤之碑」です。

碑には水城村出身の技手竹森善太郎が実測した水城跡の長さや高さなどが記されており、碑文は上水城在住の陸軍軍医、また筑紫史談会創立者であり太宰府の史跡保護を訴えた竹谷水城が撰じたものです。これらが刻まれた石は、水城村青年会が自ら、台石は宝満山から、棹石は博多から運搬したといわれています。この碑建立に尽力した水城村青年会員の氏名は今も台座に残されています。



■ 2. 水城跡からの出土遺物

水城跡では、東側の木樋取水口付近で「水城」と墨で書かれた土器が発見されています。この遺構が当時、「水城」と呼ばれていたことの確かな証拠です。また、御笠川の川岸では8世紀の鬼瓦も発見されています。大宰府政庁で使用されていた鬼瓦と同じデザインで、現在は大宰府展示館で見ることができます。



水城跡出土 墨書土器
九州歴史資料館蔵



水城跡出土 鬼瓦
太宰府市教育委員会蔵

■ 3. 水城瓦窯跡

東門跡から約200m西側の地点で水城瓦窯跡が発見されています。発掘調査により、九州ではきわめて珍しいロストル構造の瓦窯跡が2基確認されました。8世紀中頃に操業していたもので、主に平瓦と丸瓦が製作されました。『続日本紀』には天平神護元年(765)に「修理水城専知官」が任命されたことが記されており、この窯跡で焼かれた瓦が修理に用いられたのではないかと考えられています。

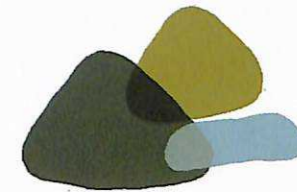


水城瓦窯跡
太宰府市教育委員会提供

文化遺産⑤ ~万葉筑紫歌壇~

東門跡には大伴旅人が詠んだ万葉歌の石碑が建てられています。大伴旅人は大宰帥として大宰府に赴任しましたが、天平2年(730)に大納言として都へ戻るようになります。大宰府を離れる際、水城に見送りに来た官人・知人達に交じて遊行女婦児島がおり、別れに際して彼女が贈った歌と、それに答えた大伴旅人の歌が石碑に刻まれています。児島が、旅人が偉い方ではなく普通のお方であれば、お別れにああもこうもしようが、恐れ多くて、いつもは激しく振る袖を、今日はこらえて振らずにおりますと詠んだ歌に、旅人は思わず涙を落とさずにはいられなかったのでしょうか。

このように、大宰府には大伴旅人の他にも山上憶良など数多くの宮廷歌人が赴任し、彼らが太宰府の地で詠んだ歌の数々は、現存する日本最古の歌集『万葉集』に残されており、「万葉筑紫歌壇」とも称されています。現在、大宰府にちなんだ万葉歌碑は東門跡のそれを含め、市内に計28基が建立され、古代大宰府の世界を今に伝えています。この『万葉集』に詠われた大宰府の情景を、現代の太宰府のそれとつなぎながら伝えていこうと、大宰府万葉会が中心となって歌碑の建立や整備を行っており、この活動が太宰府市景観・市民遺産第5号「万葉集つくし歌壇」として認定されました。



水城・大野城・基肆城築造1350年
2014年に築造1350年を迎えるのを
記念したシンボルマークです

文化遺産⑥ ~水城築造にまつわる伝説~

多大な労力を要したと考えられる水城の築造にまつわる伝説が水城跡の東西に共通して残されています。

水城跡の東門付近にはかつて「ひとつこ山」と呼ばれる小高い丘がありました。水城の土塁を造るため、人々がもっこに土を入れて運んでいたのですが、もう少しで水城に到着するところで水城が完成したとの声を聞き、運んでいた土をそこで放り出すと、その土が盛り上がり丘になったと伝えられています。これと同じような伝説が西門付近にも伝わっており、こちらは土を運んでいたのが父子であったため「父子嶋」と呼ばれています。

ひとつこ山は、昭和50年代の宅地造成等により姿を消してしまいましたが、父子嶋は現在も小高い地形が残っており、解説板が設置されています。



父子嶋



ひとつこ山跡

文化遺産③ ~水城跡の自然~

水城跡では春には満開の桜並木や菜の花、秋には一面に咲き誇るコスモスが訪れる人々を和ませてくれます。



太宰府市観光交流課提供

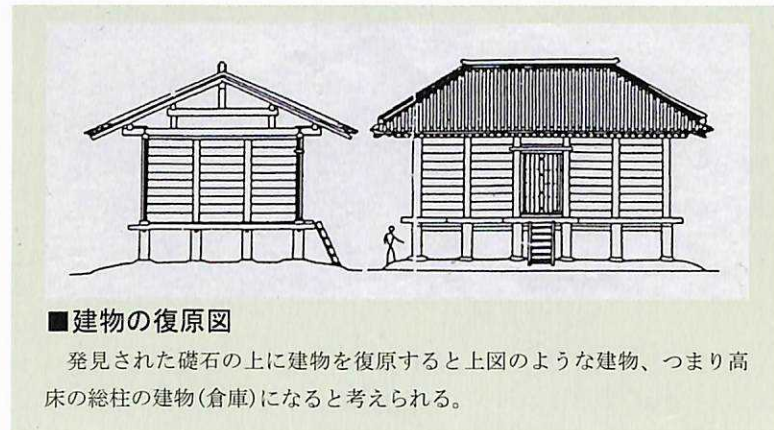
大野城跡と文化遺産

■ 1. 大野城の築城

福岡県太宰府市・大野城市・宇美町にまたがる四王寺山は標高410メートルの大城山をはじめとする山々が連なった、地域住民・登山客・観光客など多くの人々に親しまれている山です。歴史上に初めて姿を現すのは天智4年(665)、大野城築造に際してです。7世紀の激動する東アジア情勢の中、663年、唐・新羅連合軍に白村江で大敗を喫した日本は北部九州を中心とした防衛体制を固めるため、664年に水城を、翌665年に大野城・基肆城を築造しました。これらの古代山城は、百済の亡命貴族の指揮のもと朝鮮半島の技術が活かされていることから、朝鮮式山城と呼ばれています。

大野城は山全体を軍事施設としたものであり、尾根に沿って総延長約8キロに及ぶ版築土塁が築かれました。また、谷部は石垣を築いて塞ぐ構造になっていました。なかでも最大規模の百間石垣は長さが百間(約180メートル)あり、現在も壮観な眺めを見ることができます。城内へ出入りするための城門は、現在、9箇所が知られています。

城内の平坦地では、8地区で礎石建物が確認されており、その数は70棟以上にも及んでいます。これらの多くは総柱建物で、高床式倉庫と推定されており、食料備蓄、あるいは武器の検収のために設けられたと考えられています。



■ 建物の復原図

発見された礎石の上に建物を復原すると上図のような建物、つまり高床の総柱の建物(倉庫)になると考えられる。

■ 2. 信仰の山への変化

大野城築造から110年後の宝亀5年(774)、四王寺山に四王寺(四王院・大野山寺)が創建されます。四王寺の創建は、外交関係が緊張していた新羅の日本への呪詛の動きに対し、清浄な地を選んで四天王像を安置し、呪詛を祓い、国を護る祈禱をすることが目的でした。四王寺山は古代山城の軍事的な役割とともに、法力による護国の地としての役割をも併せ持つ重要な山となったのです。

四王寺は一時期、四天王像等が筑前国分寺へと遷されたこともありましたが、疾病や怪異など大宰府管内における異変の際には祈禱・修法が行われました。現在、四王寺の面影をうかがうことは難しいのですが、『類聚国史』には、四王寺は鼓峰に所在し四天王像が安置され僧4名が修行していたことが記されており、四王寺山西北に位置し毘沙門堂が鎮座する大城山山頂付近がその所在地と推定されています。ここは福岡平野や博多湾を一望できる場所であり、後に毘沙門堂経塚が造営され、12世紀の銅製経筒などの遺物が出土しています。北部九州は経塚の造営が早くから行われた地域でしたが、四王寺山では毘沙門堂経塚の他にも村上経塚、四王寺道経塚が確認されており、山麓には坂本善正寺経塚、原経塚、水瓶山経塚などが確認されています。これら経塚から出土した数多くの多彩な遺物群は九州の経塚文化を代表するものであり、四王寺山が祈りの場として重要であったことを示しています。



■ 四王寺山経塚出土 経筒
九州国立博物館蔵

文化遺産⑦ ～毘沙門天詣り～

大城山の山頂には毘沙門天を祀る御堂があります。この毘沙門堂では毎年1月3日に毘沙門天詣りが行われており、多くの人で賑わいます。お詣りした際に毘沙門天様からお金を借りて、翌年に2倍にしてお返しすると金運に恵まれてお金に困らないと伝えられています。

毘沙門天詣りは地元四王寺の方々によって守り受け継がれてきた伝統ある行事で、宇美町の無形民俗文化財に指定されています。四王寺山は古来より人々にとって信仰の山として大切にされてきましたが、現在も毘沙門天詣りをはじめとした様々な形で受け継がれています。



文化遺産⑧ ～岩屋城と高橋紹運～

標高281メートルの岩屋山山頂に位置する岩屋城は、中国地方の戦国大名大内氏が筑前国(福岡県北部)進出に伴い、御笠郡支配のため、文明10年(1478)頃に築城したものと考えられ、深野筑前守や飯田興秀らが郡代・城督として在任しています。大内氏滅亡後は豊後国(大分県)を本拠とする大友宗麟が支配し、高橋鑑種や高橋鎮種(紹運)を城督とし、御笠郡における軍事拠点としました。幾多もの合戦の舞台となった岩屋城ですが、最大の合戦は天正14年(1586)7月に薩摩国(鹿児島県)島津氏との間で行われた岩屋城合戦です。

この戦いでは14日間にも及ぶ徹底抗戦の末、城主高橋紹運以下760余名の将兵が玉砕しています。主郭(伝本丸跡)には高橋紹運の忠義を讃える石碑が建立されており、毎年7月27日の命日には太宰府市内にある西正寺で岩屋城合戦戦没者法要が営まれるなど、戦国の花と称された高橋紹運は今でも多くの人に偲ばれているのです。

文化遺産⑨ ～四王寺山三十三石仏～

四王寺山の山中には石仏が点在しています。江戸時代に、四王寺山全体を信仰の地とする動きがあり、山中を観音霊場として33箇所(かんせい)に石仏が祀られたのです。12番札所に残された銘などから、これらの石仏は寛政年間(1789～1800)における福岡城下の大火、天然痘等の流行、旱魃や大雨などの災害に際し、観音様の御利益にすがって現世の不幸から逃れようとの願いから、博多横町・博多濱口町濱・太宰府(宰府・新町・連歌屋・国分村)・宇美などの人々が西国三十三カ所観音霊場にならい石仏巡りの札所をつくり、四王寺山全域にわたる霊場建立をなしとげたことが窺えます。

石仏の台座には創建時期と前後する寛政12年(1800)や享和2年(1802)の銘が残されている一方、昭和45年(1970)の銘が記されたものや観音信仰には含まれない三宝荒神像が祀られている札所があることから、石仏の損壊や流失に際しても新たに石仏が祀られ、現在に至るまで信仰が受け継がれてきた様子を知ることができます。



文化遺産⑩ ～かつてあった道 太宰府町道～

四王寺山には昭和60年代まで、糟屋郡宇美町四王寺集落から太宰府小学校・学業院中学校へ子どもたちが通っていた道がありました。文化遺産調査ボランティアのメンバーで調査を進めていくうちに、夏の暑い日も冬の雪が降る寒い日もこの道を元気に通っていた子ども達の姿がしのばれ、それを後世に伝えていきたいという思いから太宰府市景観・市民遺産として提案され、第3号に認定されました。

市民遺産育成団体である四王寺山勉強会は、現在も毎月定期的に会合を開き、四王寺山の調査・研究とともに太宰府町道の整備活動や教育普及活動などを積極的に行っています。



文化遺産⑪ ～四王寺山の伝説～

歴史と自然が豊かな四王寺山には古くからのさまざまな伝承が残っています。たとえば、四王寺山をぐるりと巡る土塁の南西部に「鬼の腰掛け」と呼ばれる小岩があり、正月7日の太宰府天満宮の鬼すべの夜、鬼がこの岩に腰かけて、鬼すべ堂でひどい目に遭っている仲間の姿を目にして涙を流したという伝説があります。また、太宰府口城門のそばにある小高い石積みには「石こづんばば伝説」があります。戦国時代の岩屋城合戦の際、薩摩島津勢を手引きして城の水ノ手を断ち切らせた老婆を、合戦後に地元の人々が裏切り者として石を積み重ねて生き埋めにした場所といわれています。

■ 四王寺山史跡マップ

太宰府市内に残る数多くの文化遺産を市民自らの手で調査・記録し未来へ伝える文化遺産事業における成果を、ボランティア「四王寺山勉強会」がまとめ、作成した文化遺産マップの第1号です。

大宰府展示館等で配布しておりますので是非ご利用下さい。

